

# 近代日本の社会事業雑誌

——岡山孤児院の機関誌『岡山孤児院新報』を中心に——

室 田 保 夫

## はじめに

近代に入って活字文化の発達は識字教育の発達と関連し、新聞、雑誌等のマスメディアの登場を促進していった。ここには当然、新聞や雑誌の印刷技術の発達という要因も看過するわけにはいかない。さらにその文化によって人々のコミュニケーションは大きく変容し、活字を媒体にしたネットワークにも変革をもたらすことになる。具体的には政治あるいは経済、教育等の舞台において新しい方法で人心の変革を遂げていくことになる。<sup>1)</sup>とりわけ日清戦後以降、新聞や雑誌等のジャーナリズムにおいては社会問題が多く登場してくる時代的背景が存した。そして社会福祉の世界においても施設創設の登場と関連するように、機関雑誌が月報という体裁でもって、登場してくるのも時代的必然性があったと言える。岡山孤児院の創設者石井十次も一八九六（明治二九）年、『岡山孤児院新報』を刊行するとき、当時の新聞紙誌を「文明の利器」「此世を支配する能力の権化」等と日誌に認めている。換言すれば、活字媒体が社会福祉界においてもコミュニケーションやネットワーク形成、あるいは人々の慈善事業認識において大きな変革をもたらすことになる<sup>1)</sup>と表現してもいい。

ところで日本における社会事業雑誌、つまり社会事業専門の雑誌はいつ頃発刊されたのであろうか。<sup>②</sup>戦前において全国的に名が知れていたものとして、中央慈善協会が刊行していた『慈善』（一九〇九年）や小河滋次郎を中心にして大阪救済事業研究会が刊行していた『救済研究』（一九一三年）、留岡幸助主筆の家庭学校機関誌『人道』（一九〇五年）等がまず想起されよう。大阪の慈善新報社が出していた新聞『慈善新報』は谷頭辰兄と石西尚によって一八九四年八月の刊行であるが、いまのところそれは一部しかみることが出来ない。

ところで小橋勝之助によって播州赤穂の地に創設された博愛社は一八九〇（明治二三）年から『博愛雑誌』を一等早く刊行することになる。<sup>③</sup>日本の社会事業雑誌の刊行は施設の機関誌から開始されるといってよからう。それは明治二〇年代、多くの日本の代表的な民間施設が設置されていくのと関連している。いわゆる慈善事業期に社会事業ジャーナリズムの誕生がなったといつてよい。具体的には明治二〇年代に刊行されたものには博愛社の機関誌『博愛雑誌』（一八九〇年）、上毛孤児院の『孤児之友』（一八九二年）や岡山孤児院の『岡山孤児院月報』（一八九三年）『岡山孤児院新報』（一八九六年）、三〇年代に入ると東京孤児院の『東京孤児院月報』（一八九九年）や『博愛月報』（同年）『東京市養育院月報』（一九〇一年）等がある。こうした機関誌をとおして我々は、その施設の経営方針、とりわけ寄付者や寄付金額、財政の分析に関して、あるいは収容者の生活史、創設者・経営者の思想等、人物史、施設史を考察していく時、きわめて多くの恩恵を受けることになるのである。当然その中には当時の慈善事業についての考え方、地域の問題、種々の情報等々が掲載され、社会福祉史の重要な史料になっていることは周知のところであろう。

さて、この論文において戦前日本の代表的な児童養護の施設として位置している岡山孤児院の機関誌『岡山孤児院月報』、とりわけ『岡山孤児院新報』に焦点をあてて、この雑誌の書誌的な解明、若干内容を紹介しながら、時代的な意味や社会福祉史上での意義等について考察することにする。それはもちろんこの雑誌が児童福祉史、特に岡山孤児

院や石井十次の研究において重要な意味を持っていることはいうまでもないが、かかる紙誌を媒介にして慈善事業が全国的なネットワーク構築に向かう時代的要請、そして「慈善」という思想やイデオロギーが江湖に伝播していくという意味をもつものであった。

### 一、博愛社機関誌『博愛雑誌』をめぐる

岡山孤児院の機関誌『岡山孤児院月報』と『岡山孤児院新報』について論じる前に、我々はその刊行とは直接的には関係ないが、それ以前に刊行されていた博愛社の機関誌『博愛雑誌』をみていくことから始めなければならない。というのは周知のとおり博愛社は一時期、岡山孤児院と合併した時期があり、『岡山孤児院月報』の刊行にはこの問題が背景として存するからである。

一八九〇（明治二三）年一月、播州赤穂の地に小橋勝之助の尽力によって博愛社が創設された。博愛社は創設当初七つの事業を構想している。ここでのその事業とは、「博愛文庫の設置」「博愛雑誌の刊行」「慈善的夜学校」「慈善的高等普通校の設置」「貧民施療所の設置」「感化院の設置」「孤児院の設置」であり、この中に「博愛雑誌の刊行」があり、それが具体的に同年五月、『博愛雑誌』第一号として発刊されることになるのである。そしてこの雑誌は第二〇号（一八九一・一二・五）まで刊行されていくことになるが、突如、小橋勝之助の筆になる「廃刊の辞」が掲載され雑誌の終焉を迎える。さしあたり何故廃刊に至ったかを見ておくことにしよう。しかしまずこれには博愛社と岡山孤児院との合併の問題と小橋勝之助と石井十次の二人の関係から考察していく必要がある。

小橋は一八九一年四月三日に岡山孤児院を訪問し、石井と面談している。その時のことを小橋は「天父の御慈愛を

深く感じて感涙の外なかりし」(『博愛雜誌』第一三号)と認めている。一方、石井が始めて博愛社を訪れたのは同年五月八日のことである。博愛社は九一年七月二五日、念願の普通学校を開校した。その開校の日、小橋勝之助は日誌に「今日は博愛社普通学校の開校式を挙行し終日之れが為め費やせし」と認めている<sup>(4)</sup>。しかし開校間もなく岡山孤児院との合併の議が浮上することになり、財産を岡山孤児院に寄附し、普通学校も岡山孤児院の付属となった。小野田鉄弥は、当時の情況につき「然れとも其目的を約言すれば人の靈魂肉体を兼ね救ふにあり其第一着として普通学校を本年八月廿五日を以て開校の式を挙ぐ。爾來僅に數閱月計らすも孤児院と合同の議起れり主に在る事業特に其目的を同ふする事業の合同に向て誰か反対を試むることを得んや社員一同之れ主の望旨なりと信し熟議の末該普通学校を以て孤児院の付属と為すに決す而して後來其程度を高めて実地農業学校たらしめんことは我等の希望なり因みに云ふ博愛社は為に消滅し去りしか否らず石井氏も亦其社員となれり我等は益々主に在て励み之を以て犠牲献身的人物の一団体たらんことを切望して已まざるなり」(『博愛雜誌』一九号)と論じている。

一方、石井の日誌には「博愛社小野田村尾の二氏來訪(一)孤児院現今の希望を話し(二)眼を大局に注ぎて協同一致主の御業を願はずの必要を説く」<sup>(5)</sup>(九・一二)と認められ、さらに『博愛雜誌』第一九号(九一・一一・五)の「社告」には次のように報じられている。ここには明確に合併のことが「今般社員一同協議之上弊社の事業と岡山孤児院と合併致し社長小橋勝之助の名義なる所有財産一切同孤児院へ寄付致候付博愛社普通学校は同院に付属することに相成候間此段愛兄姉へ稟告す就ては以後御寄付被下候分は岡山孤児院寄付中へ算入致す可く候間此段合せて謹告候也」と『博愛雜誌』をとおして知らされていった。

かくして一八九一年一〇月二日に博愛社と岡山孤児院は合併し、九三年四月二〇日再び両者が独自に歩んでいくまで、一年半共同の歩みをしていくことになる。岡山孤児院と合併した博愛社は創設以来、小橋の構想で経営されたの

だが、しかし合併した暁にはその機関誌たる『博愛雑誌』の存在意義が問われることになった。かくして第二〇号に「廃刊の辞」が収載されることになったのである。

### 廃刊の辞

人の進むや未だ初より退くが為ならずんばあらず我の退くや未だ初より進むが為ならずんばあらずとは此豈昌黎韓氏の語にあらずや而して吾人は今実に進むが為に一步を退くの止むなき場合に遭遇せり

吾人が博愛慈善事業の為に献身し基督の新誠を世に出さんが為に勉むる蓋一日にあらず先きには同志と共に博愛社を起し彷徨ある神の子女を肉と霊との艱より救はんことを企図し斡旋も同時に又屢雑誌に因りて不肖なる意見と博愛社の模様とを読者諸君に通知して今日に至れり

計らざりき主の摂理は我等を導て岡山なる石井氏の孤児院に配し共に合同一致の運動を天下に試みしむるにありて存せしならんとは

一朝吾人の此事に心付くや静念熱禱の末終に決然之を断行せり断行したるの結果は実に前号の本誌第六七両頁に掲載したるが如し

既に博愛社を以て岡山孤児院に配す我雑誌のみ独り何時迄か依然旧の如きを得んや故に吾人は本号を以て断然此誌を廃刊せんと欲するなり然り断然此誌を廃刊せんと欲す然れとも此れ只昌黎氏の所謂進むが為め退くのみ焉ぞ退くが為に退く者の類ならんや誰かは知らん此誌の此処に死するは自ら此他日孤児院月報彼処に生まるの徴にあらざるなきを

謹んで本誌廃刊の理由を述べて親愛なる読者諸君の厚情を鳴謝す

すなわち「既に博愛社を以て岡山孤児院に配す我雑誌のみ独り何時迄か依然旧の如きを得んや」というように岡山孤児院と合併した以上、博愛社の雑誌刊行は許されることでない<sup>5</sup>と認識する。しかしこれは退くということではなく、進歩のためでもあると説得する。そして「他日孤児院月報彼処に生まるの徴」とあるように、廃刊は一方では将来的な岡山孤児院月報の刊行という期待でもあったと解せよう。ちなみに『岡山孤児院月報』が創刊されるのは、勝之助死後半年後であり、一八九三（明治二六）年八月二五日のことである。皮肉にもその時は博愛社と岡山孤児院は再度、独自の道を歩んでいくことになっていた。<sup>6</sup>

一方本家の博愛社が機関誌『博愛月報』を刊行するのは、大阪に移った一八九九（明治三二）年五月になってからのことである。かかる点からみて、『博愛雑誌』は岡山孤児院との合併時と廃刊事情を考えてみれば、『博愛月報』のルーツのみならず、『岡山孤児院月報』（『岡山孤児院新報』）の母胎であったと言えすぎであろうか。

## 二、『岡山孤児院月報』の発刊

さてこのような小橋勝之助の期待をもった『岡山孤児院月報』が発兌されるのは、一八九三（明治二六）年八月一日のことである。『博愛雑誌』廃刊後一年半以上経過している。ここには博愛社との分離独立といった背景が存する。発行兼編輯人は小野田鉄弥で印刷人は林崎将太郎、そして発行所は岡山孤児院となっている。小野田は先の博愛社時代においても、『博愛雑誌』に多くの論文を書いており、また編集事業に協力した経験があり、この雑誌の編集人としての才能や知識は備わっていたと推測される。<sup>7</sup> 同誌は二〇頁前後の小冊子で第八号（一八九四年五月）まで刊行され

た。第八号まで全て「非売品」となっているのは後の『岡山孤児院新報』と大きな相違点であり、月報の性格が未だ院内の報告を中心とした機関誌としてのみ存したからであろう。ちなみに第八号までの発行年月日と頁数は以下のとおりである。

第一号（一八九三・八・一五）一〇頁。第二号（九三・九・二五）一九頁。第三号（九三・一〇・三二）一一頁。第四号（九三・一一・二〇）二四頁。第五号（九三・一二・一五）二〇頁。第六号（九四・二・一六）二三頁。第七号（九四・四・八）二四頁。第八号（九四・五・九）二三頁。これからも窺えるように、第六号からは月刊の体裁でない、また全号をとおして頁数は一定ではない。

ちなみに第一号の構成を見ておくことにしよう。巻頭に「岡山孤児院」の欄があり、概則、現況、養育、教育、実業（活版部、理髪部、農業部）、毎月の経費につき記されている。そして「記事」として一八九三年七月中の孤児院の日録が掲載され院内での行事や寄付金名が記され、また同月中の書類及び物品表、寄付金表として四頁費やされている。最後に孤児院の最初の収容児である前原定一についての文章が収載されている。

以下の号についても内容は論文の類は少なく、事業内容、孤児院の記録、寄付書類・物品表、寄付金表、往来書簡等で、掲載内容については大して差異はない。寄付者の名簿をみてもこの頃から既に全国的な様相を呈している。ここでは月報の記事内容の一例として書簡のみみておくことにしよう。例えば第二号に徳富猪一郎（蘇峰）の石井十次宛書簡が掲載されている。徳富は『基督教新聞』掲載の孤児院の日記に感動し、書簡と寄付金を寄せたものであるが、次のように認めている。

…前略…小生儀最近両三月徒歩ニテ相済ム場合ニハ可成徒歩セント欲シ人力車ニ乗ル費用ヲ徒歩ニテ得ラル、丈

ケハ五錢拾錢ノ差別ナクソノ折々ノ勘定ニテ直チニ右ヲ貯蓄珠（陶器ニテ製シタル實珠ナリ）ニ入レ置キ候モノ有之候間直チニ右ヲ筆筒ヨリ取り出シ見候処少シハ手答ヘテ覺工候間直チニ右ヲ差出ス事ニ相決シ候…中略…金額ハ総計幾何アルカ御落掌ノ上査収下サレ度候九牛ノ一毛故ニ尊兄ノ事業ヲ裨補スルニ足ラズト雖トモ滔々タル万丈紅塵ノ裡ニ於テ猛雨ヲ衝キ熱天ヲ凌キ小生ガ健脚徒歩シタルノ報酬而シテ兄ノ至誠ニ感ジタル微志幸ニ御看取下サレ何ナリトモ経営ノタシニ相成候ハ、本望不遇之候

周知のように蘇峰はこの「貧者の一燈」に留まらず、以後岡山孤児院の事業に対して積極的に支援を送り、評議員としての役職にも就く。一方、石井も『将来之日本』や『国民之友』の熱心な読者であったし、蘇峰から思想面の影響も受けることになるのである。

こうした蘇峰の書簡に類するものは、国内のみならず国外にも及び、各号において掲載されている。例えば第六号においてはハワイヒロ在の峯岸繁太郎やホルル在の岡部次郎からも寄付金とともに送られて来ている。それは月報を通しての「貧者の一燈」といった慈愛の表現でもあり、後のハワイでの音楽幻灯隊の遊説につながるものであった。ほかにもこうした記事（書簡）は多いが、ここでは第七号に掲載された次のような倉敷某信徒からの書簡を紹介しておくことにしよう。

拝啓陳者貴院ノ月報ヲ一読致ス毎ニ小生同情ヲ表シ然レトモ家貧シキ故応分ノ寄付致難ク候ニ付キ兼テ生ハ他ニ祈願アリテ日曜日朝飯ヲ断チ候ヘバ其食料ヲ他ニ使用不仕処先般北海道某氏ノ貴院ヲ思ハレ候愛情ニ倣ヒ安息日朝飯一度ヲ壹錢五厘トナシ又小生ハ菓子好物ナレトモ聖日ニ限り菓子ヲ食ハズ其価ヲ壹錢五厘トナシ都合三錢只



今マデ二回分六錢甚ダ輕少ナレトモ生ノ情ヲ察シ御受納被下度以來続々克己仕度候聖書ニアル寡婦ノレプタ二枚トシテ御使用下サレ候得ヘバ幸甚

そして同号には『山陽新聞』掲載の「偽善者石井某」という石井と岡山孤児院の事業を誹謗した記事が転載されているのは興味深い。そこには石井を「サタン」「偽善者」「詐欺師」と断じ、孤児院を「サタンの一身を肥す為の機関」とし、石井に「痛く責罰を加へざらんや」と言った中傷の文言が披見される。また「履歴」というコラムには石井が養育した二番目と三番目の孤児の入院までの経緯が記されている。

ところでこの月報をとおしてみる寄付者の多くはクリスチャンか教会関係であると思われる、この月報もキリスト教界を中心にした限られたネットワークであったのだろう。次に刊行される『岡山孤児院新報』、あるいは音楽幻灯隊の諸国遊説によって、各地の慈善会をとおしてネットワークが拡大していったと考えられる。

しかし、この月報は第八号でもって終わっており、きわめて短命であったが、この件につき言及している石井の日誌をみておきたい。彼の日誌に廃刊の事が記載されるのは一八九四（明治二七）年のことである。「孤児院月報 断然月報を廃して年報となさん…之れ最も天父の御栄なり」、また五月二七日の「本日所感」という段には「孤児院月報を止めて年報に改むること」と認められている。したがってこの第八号で以て月報は短命ながら廃刊になったようである。そして予告どおり一八九五年の年報が発刊されている。ちなみに月報廃刊後石田祐安の『岡山基督教』が発刊されている。

### 三、『岡山孤児院新報』の発刊とその内容

#### (一) 発刊事情

石井が約二年間のプランクの後、再度、孤児院の月報を発刊するに至ったかについて石井の日記から、そして編集方針につき初期の『岡山孤児院新報』の記事や「社告」等から考察してみることになしよう。

一八九六（明治二九）年一月二四日の石井の日記には「孤児院新報につきて 一、年報を一月発刊とし 二、新報を二月より発行すべし 三、体彩：はいきなりにやりつくべし 他の新聞雑誌に模倣せず自然に有体にやるべし」とあり、一月頃より新報を出す構想が窺える。六月一二日の日記には「器関新聞を発行して大ひに気焰を吐かざる可らず、事業と新聞とは猶ほ恰も蒸気器関のごとし」、そして渡辺栄太郎を孤児院新報社長とする構想をたてている。また同月二三日の日記には「岡山孤児院発行の件につき院役者の相談会を開き 一、（主筆）：渡辺栄太郎君 二、（発行人）：河本茂四郎君 三、（印刷人）：小野田鉄弥君に委託し」とあり、「ペテー師を訪ひ『孤児院新報』発行のことにつき相談」と記されている。そして六月二七日の日記には、

偶感一、今日の人間は地上に住まずして実に新聞紙上に住む。

二、人を射んと欲せば馬を射よと

三、此の文明社会に於て戦ふものは此の理を悟り此の文明の利器を利用して大ひに戦はざる可らず

四、まず「岡山孤児院新報」てう月刊新聞より始め次ぎに毎月三回とし次ぎに毎週新聞となさん

と、ここでは新聞を「文明の利器」と把捉し、週刊紙の構想を描いている。そして同月二八日の新聞においては「新聞は此世を支配する能力の化権なり 筆は剣なり剣は権なり」「孤児院新報」は実にわが岡山孤児院の羽翼なり」「わが岡山孤児院はこれより一大飛揚をなして全世界を横行すべし」と新聞発行の意図と熱情、目的を披瀝している。ここには当時の日清戦後社会、ジャーナリズムの占める意義の高揚が背景としてあったのだろう。そして石井はこうした月報をとおして、日本全国にわたる孤児院のネットワーク作りを構想していたのかもしれない。

かくて通信省から『岡山孤児院新報』の発行許可書を九六年七月二〇日付けで受けることになる。

通第三八七七号

一 岡山孤児院新報

岡山市門田屋敷二百三番邸

発行所 岡山孤児院新報社

同上

発行人 河本茂四郎

一、毎月一回以上遂号定期発行スルコト

二、記載事項ノ性質終期ヲ予定ス可ラザルコト

三、書籍ノ性質ヲ有セラルコト

四、発行ノ目的社会宗教学術等ノ事項ヲ報道論議シ及ヒ広ク之ヲ公衆ニ発売スルコト

右各項ノ証明ヲ勘査シ第三種郵便物トナスコトヲ認可ス

但見本老部ヲ発行地本管一等郵便通信局へ納ム可シ紙面ノ体裁記載事項ノ性質種類ヲ変更シタルトキ亦同シ

明治二十九年七月二十日通信省 □印

このようにして第一号（創刊号）は一八九六（明治二九）年七月二〇日、発兌されることになる。<sup>(9)</sup>

## （二）第二号（創刊号）の発刊とその内容

創刊された機関誌は発行人には河本茂四郎、編輯人に渡辺栄太郎、印刷人に小野田鉄弥が就き、発行所は岡山孤児院新報社となっている。第一号の内容を紹介しておく、一頁に「天下の有志諸君に訴ふ」「塾舎建設費に就て」「これ天下の事業なり」「岡山孤児院の概況」の小論がある。そして「雑報」（一〜二頁）というコラムには「宗村豊袈裟君」「音楽師招聘」「横井峰夫君」「孤児年令別」「孤児県別」「河本茂四郎」「祈祷の応驗」「孤児院の食物」「吾等教育上の理念」「桑苗仕立法と児童教育」「東京慈善新報」「病児を見舞ふ」「海嘯地の孤児救済」「フランクリーンの逸事」があり、三頁から「所感漫録（二十九年）」（埴原居士）「聖書便覧」「日夕漫筆」（活版職工）「朝集会」「社告」があり、そして四頁に「故渡辺亀吉君略伝」「在院外児の書簡」「広告」から構成されている。このような内容になるが、「発刊の趣旨」といったタイトルが付された論文はない。それに相当するものが巻頭論文の「天下の有志諸君に訴ふ」や「これ天下の事業なり」である。前論文では「願くは天下の有志諸君が同朋相愛の情に励まされ天父の御報恩として各応分の助けを与えこの可憐の父母なき孤児等が衣食住に不自由なく月日を楽しく送ることの出来る様なし玉はんことを乞ふ」と寄付金や種々の援助を懇願している。また塾舎建築費の募集に付き、次の論で述べ、そして「これ天下の事業なり」という論文では「これ天下の事業なり、吾輩一人の事業にあらざるなり、これ吾人が此度岡山孤児院新

報を發行せし所以なり、願くは天下有志の諸君の本院の事につきて質問或は忠告なし被下度しことあらば遠慮なく質問し忠告なし被下度し爾來吾輩は新報上に於て或は手紙を以て諸君の質問に答へつつ出来得る丈心力を尽して諸君の指導に従はんと欲す」と訴えている。また「吾等教育上の理想」という論文では次のように論じている。

心に天国と其義とを求め、常に己が手腕に由て己がパンを食ひ、己が衣を着、己が家に住み、終日営々蜜蜂の如く働き、蟻の如く勞して余念なく、富ますと雖も衣食の憂ひなく、學者ならずと雖も読み書きに苦まず、智者ならずと雖も普通の分別に乏しからず、聖ならずと雖も野ならず、何も拔群卓越の点あることなく極めて平凡の者たりとも又何の指摘排斥すべき処なく普通にして健全なる知識と健全なる徳と健全なる体力とを有し独立独行勞働的人物を養成せんこと我党教育の理想なり

これらは無署名であるが石井の文章でないかと思われる。「埒原居士」は石井十次のペンネームと考えられるが、「無署名」の記事が多く、どれが石井の執筆による文章かは今後の課題である。一つの方法として、これを日誌から執筆を判断することも可能であろう。<sup>10)</sup>

「社告」には、「孤兒貧民の救済及び教育に係はる御意見可成御寄稿被下度候」「孤兒貧民の情況に付可成御通信被下度候」「本紙は普く天下に頒布致し度に付御名々購読者を募り御注文被下様願上候」とあり、また第二号（一八九六年八月一五日）の「社告」には「何の宗派に成を問はず各地孤兒院等の情況御通信被下度本紙は之を広く天下に御紹介可致候」とあり、この新聞が全国の貧民・孤兒のネットワーカー的な機能を果たす意図があることを窺わせているのも注目すべき点であると言えよう。

また「聖書便覧」という記事があるように、この紙誌がキリスト教伝道も一つの重要な基軸に置いていたことは石井の方針から窺えよう。ちなみに第三号（一八九六年九月一日）の「社告」には「本紙今般更に福音なる欄を設け信仰の経験、祈祷の応答、及格別なる神恵談等の事実を蒐集記載し神の能と恵を事実上証明致し度存候願くは天下の諸兄弟各自御経験（身心上）或は御見聞に相成候事有之候は、新古大小の差別なく御通知被下度取別牧師伝道師の御方には集会或御訪問の際には屢御見聞相成候もの多かるべくご面倒ながら御一筆御書留の上御通知の程願上候且又本紙此後益ます伝道の方面に力を尽くし度考に候得者は御教会の信徒及求道者へ購読方御勸誘被成下度御依頼申上候」と、この方針を天下に訴えている。そしてこれは機関誌の購読の拡大と共に、全国のキリスト教会及び信徒の慈善事業への宣伝の一環でもあった。

最後にこの機関誌が刊行されて、当時の全国の新聞や雑誌はいかなる報道をしたかを岡山孤児院と比較的縁の深い『基督教新聞』と『女学雑誌』に限ってみておくことにする。一八九六年七月七日発行の『基督教新聞』（第六七九号）では第一号収載の「岡山孤児院概説」を転載し、孤児院の紹介を為している。そして機関誌に付き、「岡山孤児院にては自今毎月一回其報告を發行せんとす今其第一号を見るに孤児院の近況消息細大洩さず知悉するを得特に同号には故渡辺亀吉君の肖像あり真摯堅実の英容其人接する思あり所感漫録、聖書便覧、日夕漫筆等所々有益なる記事あり」と紹介している。また同年翌月の『女学雑誌』第四二五号（一八九六年八月二五日）では次のような紹介記事がある。

岡山孤児院の新報出づ、孤児院が自ら以て任ずる其天下の事業の発達と、彼等熱誠篤信の慈善家等が精神を露すもの、実に之によりて聞くべし、其第二号を記する文に「孤児を社会に出す事につきて」といへるに

大胆に社会に出す可し、生命のある人の子は如何なる境遇に立つも決して亡びるものにあらず、躓くと滅びる

とは同一にあらざるなり、人は屢蹟かん、されど真正なる進歩の階段にして憂となすに足らず。

とあるもの、これ石井君につき屢々聞くの精神にして、また彼大事業を貫中するの精神たらずんばならず。石井君が此精神を以て、無告の孤児の為に一生を奉ずるため、天下は之に向つて大謝せざるべからず。此精神を知らんとせば世は此新報の出づるを歓迎せよ。

かかる当時のキリスト教系のマスメディアをとおして、岡山孤児院の名は一地方に止まらず、全国に広がっていったのであるが、機関誌たる『岡山孤児院新報』も好意的に紹介されている。

### (三)『岡山孤児院新報』の内容とその変化

『岡山孤児院新報』は一八九六(明治二九)年七月二〇日、第一号を発兌してから一九〇九(明治四二)年五月一日発行の第一四八号迄、約一三年間、刊行された。まさに日清戦後から日露戦後までの、いわゆる「社会問題顕現期」を背景としていた。この間、「編輯人」は渡辺栄太郎が創刊号から第六二号迄で、石井十次は一九〇二年一月一〇日発行の第六三号から終刊迄となっている。孤児院新報の構成は「社説」(一七号より「新報」)、論文(無署名多し)、孤児院の日誌、岡山孤児院の紹介・宣伝、寄付者名簿、入院者名簿、収支決算、書簡等であるが、しかしこれらは時代と共にかなりの変化がみられる。第一号の紙面構成については既述したとおりであるが、紙面に「目次」「目録」が掲載されるのは第四号からである。そのコラムは「社説」「岡山孤児院日誌」「論説」「福音」「雑録」「広告」から成っている。号を重ねることにコラムは「院内記者」「教育」「史伝」「小説」「あかし」「証明」「奇書」「新報」等がある。主なる初期の執筆者には石井以外で柿原正次、小野田鉄弥、高橋鷹蔵、安部磯雄らがいる。

題字は最初、縦書きであるが第八九号（一九〇四年三月一日）より横書きに変化する。第一四二号（一九〇八年一月一日）よりまた縦書きに戻る。この際、題字の大きさや形態は一定ではない。その大きさは横二七センチメートル、縦三八・五センチメートルのタブロイド版である。定価は第七号まで一銭、第八号より二銭となる。頁数は号数により変化がみられるが八頁構成が一番多い。付録は多くの号に付いているが、内容は寄付者の名簿から成っている。「月報」的性格をもっているが、毎月一回、そして発行月も厳密に定まっているわけではない。印刷所は「岡山孤児院活版部」で、発行所は「岡山孤児院新報社」である。ちなみに終刊に近い一九〇八年度の新報発行費として二七〇九円二八銭五厘が支出されている。

発行部数については、一九〇〇（明治三三）年一月の第三九号の「孤児院新報の拡張」という記事に「孤児院新報の拡張昨年一ヶ月に於ては発行部数三千部なりしもの一二月に至りては実に一万三千部に達し全国中三、四県を除くの外配せざる府県なきに至る即ち一年間に一万部を増刊するに至りしなり新報は実に我が岡山孤児院の弾丸にして活版部は弾丸製造所なり」とある。明治三〇年代、一万五千部から一万八千部程度と思われる。<sup>⑪</sup>この発行部数は救世軍の機関紙『ときのこゑ』や『人道』と比較しても多い発行部数であると考えられる。<sup>⑫</sup>以上のようにこの機関誌が刊行された時期（一八九六―一九〇九）は石井にとつて三一歳から四四歳までで新機軸を駆使し、孤児院事業が軌道に乗った時期に相当する。



#### 四、『岡山孤児院新報』の論説を中心に

##### (一) 渡辺栄太郎編集人時代(第一号から第六二号)

この時期の誌面で特徴的なのは、初期において論説的なのが多数掲載されていることである。この機関誌に掲載された「社説」(「新報」)について、主だった論文をみておくことにしよう。既述したように各号には原則的に「社説」を中心に、論文が収録されているが、しかしここではさしあたって初期の論稿、すなわち機関誌「社説」のコラムにある第三四号までを対象にして、如何なる論が張られていたかを若干乍ら典型的に捉えておくことにしたい。

まず第一は上述した「吾等教育上の理想」のような「教育論」である。例えば第五号(一八九六年一月一五日)の「主義は目的に非ず」という論文では「教育とは人性自然の発育を助長する外ならず。別言せば人類自然の本性本能を訓育して何物の為にも束縛妨害せらるゝことなく、凡の物に卓越即ち霊長たらしむるの能力を発揮するにあり。之れ主義を超て一段高尚の地位に横はる(を)目的、理想とす」るものと解している。第六号(一八九六年二月二〇日)の「教育の自由を望む」という論文では「あゝ宗教の自由を許し、実業の自由を許せる我が政府は何故に人材輩出の源泉たる教育を自由にせざる、現今文部省の統一的教育主義は実に活ける教育界を死せる器械的人物製造会社となせるにあらずや器械は活ける動物を生む能はざるが如く干渉の統一教育界は到底活ける人物を輩出する能はず」と当時の国の教育を批判しているのは注目される。これらは孤児院での理想的な教育を背景としてのことであろう。ルソーやペスタロッチの活ける人物を輩出するという教育への憧れがそこに在るように思える。

第二に慈善事業論が指摘できる。第七号(一八九七年一月二一日)の「社会主義の潜勢」という論文では「吾人は今日育児院、救済院、感化院、職工養成所等の如き諸の社会事業が追々行はれ来り、後日の憂を未だに防渴せんとし

つゝあるを見て誠に喜に堪へず、吾人は我社会が社会主義を要するの情態に陥らんことを恐るばかりなり、之れ社会主義を恐るゝにあらず、寧ろ吾人は社会主義を以て最後の匡救法と信ずる者なれども、社会主義の必要な社会は更に望ましかればなり」と、そして社会事業が「社会主義の代務」たらんことを期している。また第一二号（一八九七年八月一日）の「日本人の慈善心」という論文では「願ふに邦人の慈善心は尚未だ幼稚なるからんや、其平常事なきの時に当て心を慈善に傾くの厚薄果して如何」と英米に比較し、日本人の慈善心、フィランソロピーの哲学の未熟さを慨嘆し、次のように論じている。

吾人不幸にして我邦金満家なる者か生前は固より死後其遺産を学校或いは公益の事業に寄付せし事あるを聞く甚だ稀にして祖父一代の汗血に成れる処孫一朝の蕩費に終るを聞く甚だ多し、噫是をして若人才の養成技術の奨励若くは諸般慈善事業の為に其一部をだに義捐せしめんか、其功德は永く滅せず、其名譽は不朽に伝ふべくして、社会の福利に寄進すること幾何ぞ吾人は我邦人慈善の心に啻にあへ憐なり如何に不憫なり気の毒なりと云ふ一旦の惻隱に留らず、社会永遠の福利の為に寄進すると云ふ今一層の高尚なる理想に出てんことを希望して止まざるなり、

第三番目として宗教論とりわけキリスト教論がある。慈善事業とも関連するが、例えば増野悦興のバーナードに関する訳文「孤児の父医学士バーナード及び其事業」（五号）やジョージ・ミュラーの訳文「信仰の生涯」、安部磯雄のエドワード・ベラミー「ルッキングバックワード」の訳文「回顧」等が掲載されている。キリストや福音についてはコラムの「福音」等とおして論じられる場合もある。例えば第九号の「キリストならば」という論文は人間如何な

る場合においても、先ずキリストなら如何なる行為を為すか、ということを考えて行動すべきであることを説く。すなわち「悲にも即ちキリストを思ひ、喜にも即ちキリストを思ひ、怒りにも即ちキリストを思ひ、十字架のキリスト悲めと教へ給へは悲め、喜へと教へ給へは喜へ、怒れと教へ給へは怒れ、十字架上のキリストのみ唯汝の疑を質するに足のみ、英雄に之く勿れ、豪傑に之く勿れ、学者に之く勿れ、智者に之く勿れ、賢者に之く勿れ、彼等は適以て疑を重ね惑を来すに足るのみ」と。畢竟キリストに倣いて生きよ、と言う趣旨であろう。

第四番目として岡山孤児院について論じた文章が多い。第二三号（一八九八年八月三十一日）の「西米戦争と岡山孤児院」という論文では、「若し今日にして吾国四千万同胞の同情を得て賛助員一万人以上に達し西米戦争やんで米国有志者の非常なる同情を受くるにあらずんば吾孤児院は日に益々困難の谷に陥るの外なきなり」と窮状を訴え、「願くは上天この人類を顧み西米戦争をして全く其肩を結はしめ吾邦経済界の恐慌をして平和に復せしめこの可憐なる三百の羊をして平安に爾の愛の御翼の下に世界同胞の温かなる同情の中に成長することの出来る様ならしめ玉はんことを西哲曰く社会は一の有機体なりと微々たる一孤児院また日清戦争或は西米戦争の余毒を蒙るア、悪むべきは戦争なる哉」と論じている。ここには日清戦争後社会の貧富の懸隔、孤児の増加、そして寄付金の減少という背景が在ったことは確かだが、孤児院が国際的視野で且つ政治の関係で捉えられている点に注目していいだろう。

また機関誌として当然ではあるが岡山孤児院への寄付及び宣伝的なものが多い。一八九八（明治三一）年六月三日発行の第二一号の「一日に三里三毛余」というのは、月十銭で賛助員になれるということ、かかる人々が一万人以上れば三百人の孤児を十分に養える。「願わくは天下の仁人義士、自ら進んで賛助員となるのみならず、朋友知己の人々を勧誘して、この可憐なる同胞を救済せんがため一人でも多くの賛助員を募集し玉はんことを切望の至に堪へざるなり」と。そして同号の「音楽幻灯隊全国巡回の目的」というのは二月五日に発足した音楽幻灯隊の説明である。「之れ

岡山孤児院の主義、目的及び現況等を社会に発表し孤児救済の必要を社会に訴へ遍く社会の同情を喚起し益々孤児救済事業の拡張を計らんがためなり。全国至る所の有志慈善家諸君願くは深く此拳に同情を表し出来得る丈の便宜と応援とを与へ玉はんことを全国の主にある兄弟姉妹願くはこの一隊の上に大能の聖手に加はりて著しき主の証をなす様常に御祈りあらんことを」と全国の篤志家に呼び掛けている。

そして最後に「嗚呼大人物」（第五号）、「一死あるのみ」「朝」（第六号）、「静思」「勝利は黙行にあり」「人情と天意」（第一〇号）のように道徳論、人生論、あるいは随筆のような類の小論も多く掲載されている。このように初期の社説には多様な論文が収載されており、宛ら小雑誌の様相を呈している。その意味で初期には訳文を含め、論説がかなり多く掲載されているが、号を重ねるにしたがい、論説の類は減少していく。

## （二）石井十次編集人時代（第六三号から第一四八号）

『岡山孤児院新報』の編集人が石井十次に代わるのは、一九〇二（明治三五）年一月一日発行の第六三号以降である。当時渡辺はサンフランシスコに移住しており、実質的に編集者の役割は果たせず、石井に代わったのだろう。しかし前号の第六二号と比較しても紙面上の変化は全くない。この頃の紙面構成は、初期のそのように多様なコラムはなく、「孤児院日誌」や「寄付金名簿」等の孤児院の報告が中心になっている。

以下、石井の編集期間中の目に止まった二、三の記事を紹介しておくことにしよう。一九〇五（明治三八）年一月一日発行の第九九号の巻頭論文は「時局に対する本院の覚悟」である。「日清戦争に懲りたる本院は日露開戦の噂ある頃より戦争の打撃を免かれんがため全力を尽して戦争と戦争の結果不景気のため社会より棄てらるゝ、無告の孤児並軍人遺児を収容し本院の天職をこの戦時に於て遺憾なく竭さんことを覚悟し一月早々準備委員を台湾に遣り」

云々と、台湾で慈善音楽会を開催したことを告げている。そして皇室より二千円の下賜金を受け、一層の責任重大となり天下の同情も著しく注目されるところとなったことを報じている。<sup>13)</sup> 石井にとって戦争とは孤児との、施設経営との戦いでもあった。「三百人餓死するも千人になりて餓死するも餓死は同じ」と悲壮な覚悟を開陳し、「大胆に解放主義をとりて無限に天下無告の孤児を收容し」と無制限主義を訴えている。しかし「天下の有志者慈善家諸君願くは吾人の微哀を憐み同情の涙を注ぎ一は以て出征軍人を以て後顧の患なく君国のために戦はしめ一は以て天下無告の孤児をしてこの光榮ある戦争のため飢渴を感じしめ玉ふ勿れ」と同情を期しているように、戦争には反対しない。<sup>14)</sup>

第一一三号（一九〇六年三月一五日）の巻頭には「凶作地孤児救済」という見出しで次のような記事がある。「本院は東北凶作地に於て窮困の余其子を棄て、逃亡し或は其愛児を売るものありと悲報に接し孤貧児救済の責任を感じ評議員諸氏の同意を得院長自ら同地方に出張し三県知事新聞社及び東北凶作救済会に謀り福島、仙台、岩沼に孤児救済所を設け事務員及び保母を派遣し孤貧児の救済に着手し僅々十日間に收容せし孤貧児の數已に五十名に達せり」と。周知のように岡山孤児院は東北凶作に対処して、孤児の無制限收容主義を宣言し、石井自らが凶作地に出張し以後約八百名もの孤児を收容することになる。第一一四号から第一一六号（一九〇六年六月二〇日）には數回に亘る孤児たちの輸送報告が掲載されている。ちなみに第一一六号の「現在院児數」によれば当時男七八〇人、女三二人、合計一、二〇二人となっている。

さて孤児院は一九〇七（明治四〇）年四月でもって創立二〇年の記念会を持つことになる。第一二七号（一九〇七年五月一五日）には四月二〇日開催された創設滿二十年祝会の様子が報告されている。そこで石井は次のような演説を為している。

回顧いたしますれば今より滿廿年前私が巡礼の孤児前原定一を救済せしより今日までの間に内外の同情者より寄付せられし金額四十三万余円、日本全国より救済せし孤児千八百十六名にして敷地壹万貳千坪建物八十棟を有し常に千人の孤児を教養する事を得るの設備をなし卒業生約四百人を出し現在千二百の児女の教養をなせるは天父の御冥助と 両陛下の御仁徳と皆様方の御同情に外ならず、茲に千二百の院児に代り御礼を申し上げます

乍併之までの廿年間は我岡山孤児院にとりては試験の時代にして、孤児院の組織はコウすればよい、孤児院教育はこうなれば出来るといふ事がわかつた迄にして本當の事業はこれからでございます

そして「私は二十年期を迎へまする迄は、岡山孤児院は果して永遠に遺すに足るべきものであるか否かに付て考へて居たのでございましたがいよいよ廿年期を迎ふるに当りましてこれなれば後世に遺しても差支ないと自信する事が出来る様になりましたから」云々と、一応の事業としての成功の安堵を述べたものである。石井は同時にこの席上、一口百円の基本金一万口、すなわち百万円の募集を訴え、財政的基盤の安定を計ろうとするが、この計画は後に撤回されることになる。またこの号には徳富蘇峰の二〇周年を記念する次のような文章も掲載されている。

他人より之を見れば、固より献身的なり。されど当人より之を見れば、寧ろ吾が志を行ひ、吾が嗜を遂げ、吾が樂を楽しむのみ。彼は疆めて而して後孤児の父たるにあらず、孤児の父たるを好むが故に父たるのみ。世間が彼に同情するは、彼が最も希ふ所なるべしと雖も、彼に向て浮誇なる讃辞を与ふるは、彼に取りては、迷惑千萬なる可し。同情は彼の志を恢宏するのみならず、寧ろ進んで要請する場合もある可し。讃辞に至りては、実は思ひ設けぬ事也。況んや成敗を度外に措きたる彼が其の世俗の所謂小成功に酔ふて、其の素志を失墜す可しと懸念

するが如きは、未だ彼の心事を知らざるに坐す。惟ふに岡山孤児院は、国民的一大制度となる時節あるべし。然も其の基礎は終古、創立者の芥子種程の信仰によりて建つ可き夫

そして「実に人の信念ほど、畏ろしきものはなく、人の一心ほど、貴きものはなし。芥子種の信仰は、以て山をも動かすべしとは、決して憑拠なき空首にあらず」とも石井とその事業を評している。徳富にとって石井の事業は明治二〇年代中頃からの関心事であり、実際評議員という立場からの石井評でもあった。

## 五、『岡山孤児院新報』とその周辺

前章において、機関誌に掲載された論説や小論を中心に一部紹介したが、ここでは第一四八号に亘る機関誌に異なる記事が収載されていたか、そしてそれは石井十次研究や岡山孤児院研究にいかなる意味があるのか、そしてさらに社会福祉史や近代史一般についての意味を論じていくことにしよう。もちろんすべてを論じていくのではなく、この岡山孤児院の機関誌として特徴ある記事を典型的にいくつか紹介するにとどめる。

### (一) 石井十次研究とその周辺

まず石井署名のいくつかの論文が掲載されていることに注目しなければならぬ。例えば「所感漫録」(第二号)「基本金募集につきて」(第五五号)「岡山孤児院に対する恩賜」(第九三号)「創立滿廿年祝会に於ける感謝演説」(第一二七号)「基本金募集廃止について」(第一二九号)「不足金につき同情諸氏に謹告」(第一三二号)といった論文

(小論)である。<sup>15)</sup>先の社論や巻頭論文のうち石井の書いたものをまだ確証はしていない。また社会事業雑誌やキリスト教系雑誌等に掲載された石井の論文は、留岡幸助や山室軍平ら同じキリスト教社会事業家と比較してもきわめて少ない。新報の無署名論文から石井論文を抽出していく作業をしていく中で、そうしたことを少しでも補えるものとなっていることは確かであろう。かかる観点からも基礎的作業として石井の論文目録作成の作業が残されている。

次に石井十次の書簡が沢山掲載されていることも注目すべきである。石井書簡については石井の直筆の書簡が石井十次資料館のみならず、例えば蘇峰の追遠文庫のような資料館に残されているものや、児島焼一郎が編集した『石井十次日誌』や他の雑誌等にも窺う事が出来るが、この新報にも多く掲載されている。

一方、石井宛や岡山孤児院宛の書簡も多数収載されているのは貴重である。<sup>16)</sup>それは石井の交友関係を知るものとなり得るし、その中には卒院生らが石井に宛てた書簡は後の彼らの生活を知ることとともに、彼らと石井との関係を知る上に大切である。また石井の行動(消息)記録が多数掲載されている。彼の日記が残されて且つ公刊されており、その詳細な記録はそれに頼ることになるが、新報に掲載された石井十次に関する記事はそれを裏付けるもの、あるいは補足するものとして、石井研究において重要な史料となる。

そしてこの雑誌からは石井の周辺にいる人たち、たとえば孤児院関係なら、小野田鉄弥、炭谷小梅、光延義民、渡辺栄太郎、岩村真鉄、大庭猛、小野謙二郎といった人たち、あるいは石井の友人関係として大原孫三郎、徳富蘇峰、ペテー、原胤昭、三好退蔵、田村新吉といった人々の動向も伺うことが出来る。また彼と関係の深かった「故渡辺亀吉君略歴」(第一号)「故小野田登良子」(第八号)「故武用五郎邊衛君之略歴」(二六号)「森上信君逝や」(第一四一号)等、そして無名の孤児たちのものの追悼記事もあり、生前中の関係とともに彼らの人間像にも迫れるものであろう。



## (二) 岡山孤児院史研究とその周辺

「岡山孤児院概則」八条に「毎月一回岡山孤児院新報を發行して院況を報告す」とあるように、岡山孤児院の機関誌であるから、当然孤児院関係の記事が圧倒的に多いことはいうまでもない。もちろんここでは施設史（岡山孤児院史）というような範疇に限って論じていくが、例えば、各号において岡山孤児院の日誌（日録）が掲載され、客観的に寄付金収支決算表や寄付金名簿、決算報告、財政に関すること等、岡山孤児院の運営に関する基礎的な財政の史料提供も豊富である。もちろんこれは石井十次資料館襲蔵の原史料があるわけで、原史料があるものについてはこうした記事は二次的な意味しかない。寄付金名簿はこの施設機関誌でもそうであり、一見、無味乾燥な感を免れないが、財政分析のみならずそれを細かく分析するといかなる階層、地域等からそれがなされているのかを知る手がかりになる。また孤児院内において、何が起こったか、あるいはいかなる日々を送ったか、そうした施設の日常が月毎に細かに報告されており、処遇方針に変遷等も窺うことが出来るよう。<sup>17</sup>さらに内外からの書簡と共に寄付金が送られている来ていることの報告があり、そこにはいろいろな情報が込められているといつてよい。

孤児の岡山孤児院への入退院についての記事も多い。それは時には写真入りで孤児の来歴を説明し、いかなる境遇の中でここに送られることになったかの経緯が記されている。もちろんこれは個人情報面の慎重に取り扱う必要があるが、こうした入院児童とともに退院児童について、あるいは退院した児童の消息についても報じており当時の児童たちの実態を知る上で重要である。そこにはその都度院児数も掲載されていて施設史からも参考になる。また一九〇三年八月発行の第八二号には数名の発起人によって同窓会が組織され「岡山孤児院同窓会規約」<sup>18</sup>が掲載され、「各地に散在する本院出身者が悉く入会せんことを切望す」と呼びかけている。

そうした記事の中でも、その時々時代の状況の中で施設の対応の様子を読むことが出来る。例えば一九〇五（明治

三八）年の東北凶作において、八〇〇名を超す東北の凶作地の貧孤児を受け入れたことに関する詳細な記事がある。第一一三号（一九〇六年三月一五日）には「本院は東北凶作地に於て窮困の余其子を棄て、逃亡し或は其愛児を売るものありとの悲嘆に接し孤貧児救済の責任を感じ評議員諸氏の同意を得院長自ら同地方に出張し三県知事新聞及び東北凶作救済会に謀り福島、仙台、岩沼に孤児救済を設け事務員及保母を派遣し孤貧児の救済に着手し僅々十日間に収容せし孤貧児の数已に五十名に達せり尚本院は此際六才以上十二才以下の孤児及び事情之に等しき貧児に限り無制限に収容する覚悟なれば今より五六ヶ月の間には数百の孤貧児を収容するに至るべし」と報じている。そして次号の第一一四号には写真入りで「第壹回東北凶作地収容児」の記事があり、次号（第一一五号）には二回から五回の輸送記事がある。また第一二八号には「東北凶作地収容児中送還報告」という記事がある。

こうした記事は孤児院の受け入れという観点からのみならず、第九三号の「戦争と孤児」という「雑報」記事は露戦争の為に、貧困で父が自殺したケースや戦争で父が負傷して帰還したが養育出来なくなった児童のケースを報じている。このように戦争の犠牲者が孤児院に送られざるを得ないような時代状況を読み解く事が出来る。

さらにこの月報をとおして各地の孤児院、例えば神戸孤児院、濃飛育児院、博愛社、山陰慈恵院、金沢孤児院等の情報も掲載されており、他施設の歴史を考える上で貴重な史料となっている。

### (三) 音楽幻灯隊の動向

#### (1) 日本各地での動向

一八九九年六月二九日「音楽隊解散せられしより我が内国幻灯遊説隊は初陣として作州福渡を攻撃せり主戦隊員は大西、小野田、大島の三君にして石井院長は午後より高原、井口の二君を伴ふて応援せられたり」（第三三号）と報じ

られている。明治三〇年代における岡山孤児院の大きな事業として、音楽幻灯隊の日本全国の遊説があるが、これにつき各地での報告がなされており、その実態を知ることにより大きな情報源を提供してくれるものである。<sup>19</sup>この遊説隊の目的はもちろん賛助会員の募集という目的があった。第三五号付録の「岡山孤児院賛助員募集」という中に「岡山孤児院は昨年五月左の方法にて賛助員壹万人を募集し毎月賛助金壹千円を集め三百の孤児安養の道を定めんと欲し之れを天下に発表せり然るに今日まで僅に一年三ヶ月にして全国各地より入会を諾せられたる方々已でに五千七百人に達せり（尚ほ四千三百人の不足なり）天下有志家慈善家諸君願くは毎月十銭即ち一日三厘三毛宛を節約して賛助員となり速かに本院の希望を満たしめ給はんことを」とあり、「申込書」には毎月十銭の寄付を請うている。<sup>20</sup>

以降その動向について、多くの号において、日本各地で行われた音楽幻灯隊の様子が報じられている。そして、それを準備するために慈善会が結成されていること、さらに詳しい寄付者名簿等が掲載され、そのことは日本の、とりわけ明治三〇年代当時の社会状況が透けてみえる格好の史料となっている。<sup>21</sup>

## (2) 海外の動向

日本各地だけでなく、海外への音楽隊の派遣とそこに展開される慈善会や慈善事業の様子が窺える。それをここではハワイ・北米関係と東アジアとの二つについてみておくことにしよう。これは海外での遊説は寄付金集めといったこととともに、救世軍の思想的な影響によってもたらされた孤児院の植民事業と関連もある。また個別ハワイ・北米に関していうと、日本人移民の問題、そして東アジアに関しては植民地問題と関係してくる。

① ハワイ、北米への派遣

ハワイへの派遣は一八九九年の音楽隊の派遣が初めてのことであり、以後一九〇二年、〇三年、〇九年の四回にわたる音楽隊の派遣につながり、初期においては渡辺栄太郎の「海外幻灯隊通信」(第三六号)や「海外幻灯隊」(第三八号)「布哇通信」(第七一号)というコラム記事等とおして知ることが出来る。それはハワイにおける日本人移民はもちろんのこと、現地の人々にも岡山孤児院の存在を植え付けることとなった。そして多額の寄付金を得ることになる。その及ぶ範囲はオアフ島、ハワイ島、マウイ島、カウアイ島に至るハワイの主要の島々に及んでいる。そうした報告が逐次この新聞に報告されている。もちろん現地新聞(日本語や英語新聞)記事との照合の必要性もあるが、派遣者からの報告は移民研究からも価値あるものと考えられる。

さらに北米大陸のサンフランシスコやオークランド、シアトル等での報告は「米国通信」や「米国便り」といったコラムをとおして窺うことが出来る。とりわけサンフランシスコからの報告が多い。当時ハワイに立ち寄ったあとはサンフランシスコに渡るというルートが一般的であり、当地での活動とともに寄付金名簿や金額を知ることが出来る。また日本と同様に各地で孤児院を支援するような慈善会が出来ていることもこの新報をとおして知ることが出来るのは興味深い。たとえばハワイ・オアフ島においての慈善会が詳細に報じられている。明治末期になれば第一四一号掲載の小野田鉄弥「布哇通信」やとりわけ第一四七号の「布哇各島慈善会報告」は五頁にわたって詳しい現地での寄付者や慈善会について報じられている。ハワイ・北米については別稿で論究する予定である。

② 東アジアへの派遣

一九〇三(明治三六)年一二月の新報には「朝鮮通信」というコラムがあり、小野田鉄弥が書いており、以下、釜

山通信、仁川通信、京城通信等が掲載されている。また同号には『漢城新報』（二月二五日）の社説「岡山孤児院の分院を京城に設くべし」を転載している。ちなみにその記事は以下のものである。

岡山孤児院の歴史と成績は何人も称揚して已まざる所なれば、其の院生の一行が我が京城に来る、必ずや日本人一般の同情を博すべし、余輩も亦院生が行先き光明確実なる独立營業に就くに至らんことを偏に希望して已まざるなり…略…

要する処は唯将来孤児をして光明確実なる独立營業に就かしむる其孰れが不便なるを決するにあるのみ是を以て余輩は岡山孤児院の分院を京城に設立せんことを勧告する。

韓国の慈善会は京城慈善会、龍山慈善会、仁川慈善会、釜山慈善会、平城慈善会等の報告が音楽幻灯隊の報告と関連して多く寄せられている。

また清国や台湾における報告記事も沢山ある。例えば第一一二号の「大連通信」、第一三五号の「満州宮口慈善会」「大連慈善会」といった記事であり、ここには先に見た朝鮮と同様に、天津や北京慈善会、奉天慈善会、長春府慈善会、公主嶺慈善会、旅順慈善会等、台湾も台北慈善会や台中慈善会等の記事が当地での詳細な活動記事と共に報告されている。このように各地の慈善会の様子が報告されており、日本のみならずハワイ・北米や東アジア等の海外、植民地において、現地新聞との記事を照合していくことも今後の研究課題であろう。<sup>22)</sup>

こうした記事は日本の初期の児童養護施設がいかなる理念や財政、処遇のもとで運営されていたのかということ、それはジャンルのには施設史にならうが、そうしたことを具体的に伺うことができよう。またその中心的人物は石

井十次であるが、彼の個人的な指導をあったにせよ、財政一つとっても、実際の事業は多数の院内外の人々に支えられていたものである。それは先述の無数の寄付者によっても裏付けることができる。

#### (四)、卒院生の書簡を中心に

(一)でも触れたが、この新報には卒業した院生からの書簡も多く掲載されていることに注目すべきである。内外に在住する退院児童の石井宛の書簡等は彼らの現状報告のみならず、孤児院内での処遇や教育に関することもあり、きわめて重要な意味をもっていると言えよう。それは日本各地におけるものは当然だが、ハワイ、北米、アジア域から寄せられている。この背景には当時の院生たちが孤児院出身であるという複雑な心境の中で生きていかなければならない状況は無視することは出来ないが、それは一方で、各地で逞しく生きていくことの証でもあり、石井も一番気になっていたことと推察される。例えば一九〇三年一月発行の第八五号には朝鮮から前原定一からの書簡が掲載されているのもその一例である。

米国本土やカナダの都市に渡った多くの孤児たちから、書簡が時には寄付金と共に孤児院宛に送られてくる。その都市はサンフランシスコ、バンクーバー、シアトル、ニューヨーク等である。その孤児の数は一〇人以上にのぼる。

その中でサンフランシスコにいる岡本儀助の書簡は断然多い。岡山孤児院の卒院生を当初は米国へ移民させていくとする考えもあり、彼がその先鞭をつけていくが、これは「岡山孤児院と植民」という課題のみならず、彼の多くの書簡をとおして、彼の個人史を知る上において、かつ移民史からも重要な史料となろう。

第一四〇号（一九〇七年九月一〇日）「在米国出身者岡本儀助」によれば、石井との邂逅は一八八七（明治二〇）年七月三〇日のことである。つまり一人目の前原定一と二人目の孤児の二人を養っていた時、姉弟二人を連れた女巡礼

がやってきて、六歳の弟の方（儀助）の養護を石井に頼んだ。彼は孤児院小学校を卒業し、成績優秀であったから、関西中学校に通う。三年で退学し渡米を志し、孤児院活版部で印刷の技術を習得し、一九〇三（明治三六）年六月末渡米し、日米新聞社活版部で働くことになり、昨年（〇六年）オークランド太平洋印刷会社の職工長に聘されることになった。そして〇七年七月二九日に結婚した。彼については多くの書簡が月報に収載されており、出身者の動向を知ることが出来る一人である。またこれは移民史とも深く関わっており、彼が移民者であることと同時に日米社といつた日系新聞社に勤めていたことも重要である。

このように『岡山孤児院新報』は孤児院経営がかなり軌道に乗った時期の約一三年間、一四八号に亘って多くの論説や記事、報告を江湖に知らしめてきた。そこには石井や岡山孤児院研究の重要史料であることはいまでもなく、『石井十次日誌』とは違う種々の情報が埋もれている。比較的早い時期に刊行されていることにおいては、社会福祉史にかかわる沢山の情報が埋もれていることはいまでもない。しかし石井の実践の影響はさておき、機関誌のみについて留岡の主宰した家庭学校機関誌『人道』と比較すると、発行部数の多さにもかかわらず、これは留岡の資質とも関連しようが、石井自身が多くの論説を発表していない。その点で孤児院経営や児童福祉史から評価は出来るが、石井は社会事業界の理論的な教導役を果たしたわけではなく、それだけ『岡山孤児院新報』が初期の計画に反して機関誌としての性格からは脱却していない。まさに岡山孤児院の機関誌であったのである。

### おわりに

このようにして『岡山孤児院新報』は一八九六（明治二九）年七月以来、爾後月刊誌として発行されてきたが一九

○九年五月一五日発行の第一四八号でもって終わることとなる。しかし第一四八号でもって何故にこの新聞が廃刊になったかについての記述もなく、ましてその理由は明確でない。また当時の石井の日誌にはその件についての言及は何もない。石井十次資料館には廃刊後、ガリ版刷りの「週報」が残されているが、これが月報に代わるものだとは考えられない。『岡山孤児院年報』にも一九〇九年五月でもって廃刊とあり第一四八号が最終号であることはほぼ間違いないと思われる。一九〇九（明治四二）年の「年報」には「由来本院には岡山孤児院新報を発行して同情者各位に院況の報告をなすこと多年なりしが昨四十二年五月限り全く之を廃止し之に代ふるに更に『年報』を刊行し以て現況及び過去一ケ年の状勢を報告することとなせり」（二頁）とあり、五月三〇日の条に「本月限り岡山孤児院新報を廃す」（八頁）と報じられている。廃刊理由については触れられていない。ただ当時の日誌からは六月一日に東洋救世軍の再出発を覚悟していることが読み取れる。そして、孤児たちは茶臼原へ移住していくという背景があった。

総じて我國の歴史を考えてみると、社会福祉史の研究にはまだまだ未開拓の分野が如何に多いかが気付かされる。最近漸く社会史に対して注目されるところがあり、従来取り上げられてこなかった分野においても人々の目が行くようになりつつある。社会福祉史の対象としている貧民、孤児、病人、障害者、老人、或は保育所、孤児院、救護・教護等の施設、スラム、セツルメント事業、監獄等々、かかる人々や地域、施設、事業が歴史の中で如何なる布置を構成しているのか、あるいは意味を持っているのかを問うていく作業は地味乍ら社会福祉学は言うに及ばず歴史学の課題としても重要である。岡山孤児院に関して言えば、日本近代史の中で「孤児」の持っている「意味」はいったい何なのか、あるいは「孤児院」の「存在」、そしてその「経営」とは如何なる存在なのか。さらにその中心人物であった石井十次の思想とそれを支えていた人々の精神とは、かかる生活史や精神史を歴史という縦糸との交差の中で考えていくことが必要であろう。すなわち孤児院といった児童が生活する場の研究は単なるその事実解明だけでなく、全



体との関連の中で把捉し、その存在を歴史的展開の中で考察していくことが大切である。この全体とは「孤児の社会史」「孤児院の社会史」としての位置付けといえようか。単なる近代史の落穂拾いという消極的な課題として位置付けることなく、歴史から一見外れたマージナルな領域への積極的な関心であり、一孤児院を素材にして「近代システム」としての社会事業を解明していく作業が極めて重要であろう。すなわち家族や地域から「排除」された孤児たちが、施設に「包摂」されていく過程であり、そしてこの「空間」において様々な試み、機略が展開されていく。かかる意味からもこうした機関誌は重要な意味をもっているのである。

注

- (1) 近代日本の新聞の歴史については、山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、一九八一）や春原昭彦『日本新聞通史』（新泉社、一九八七）等を参照した。春原は時代区分として、明治二〇年代を「パーソナル・ジャーナリズム」として「個人の思想や個性を強烈に反映した新聞」とし、次の「近代新聞の成立期」（明治三〇年～四五五年）と区別している。
- (2) ここでいう「社会事業雑誌（ジャーナリズム）」という用語は、例えば「キリスト教ジャーナリズム」とか「女性雑誌」というように、これまで筆者は社会福祉の歴史においてもジャンルが成立するであろうという意味で使用してきた。これには社会事業のみを対象としたものの外、施設機関誌や各府県の社会事業協会の出すもの等が対象とされよう。また社会事業の範疇に、その時代的特徴を考慮するなら、広義に解釈して犯罪・非行、労働・社会政策、監獄改良や廃娼、社会改良関係のものも包摂されてくるかも知れない。
- (3) 博愛社の機関誌『博愛雑誌』については、拙稿「博愛社機関誌『博愛雑誌』について」（『関西学院大学人権研究』第八号（二〇〇四年三月））を参照されたい。この論文で、該雑誌の書誌的な説明と二〇号にわたる雑誌の内容分析をおこなっている。
- (4) 小橋勝之助は博愛社の創設者であり、現在、彼には三冊の個人日誌がみつかっている。これについては室田・鎌谷かおる・片岡優子「小橋勝之助日誌（一）」（『関西学院大学社会学部紀要』第一〇三号）「小橋勝之助日誌（二）」（『関西学院大学社会学部紀要』第一〇五号）を参照されたい。

- (5) 石井十次の日誌は現在、児島嘘一郎氏が編集した『石井十次日誌』（石井十次友愛社、一九五六―一九六四）において、一八八二年から一九一四年までの日誌三冊が刊行されていて、それを利用して、以下の行論において日誌からの引用はこれに依拠する。
- (6) 博愛社と岡山孤児院との分離について『博愛社』（博愛社、一九〇三）には「岡山孤児院との分離」と題して「本社が先に農業を以て教育の要素とする一貫の主義によりて合同したる岡山孤児院は、頃来漸く其方針を改め、農を措て工商を主とするに至りたるを以て、前年同院より移して教養せる児童の過半を返還し、更に九月に至り、同院の財政いよいよ窮乏を告げ、彼此の事情は寧ろ合同を中止するの双方に利益なるを認め、茲に全く従前の關係を絶ち、各々独立して斯業に貢献すること、なれり」（二〇頁）と記されている。一八九三（明治二六）年三月に小橋勝之助が昇天した。中心的人物を失って博愛社の動揺もそこにあつたものと解せられる。
- (7) 小野田鉄弥（一八六四―一九四八）は茨城県猿島郡古川町の出身である。一八八三年に立教学校神学科に入学。九〇年、友人小橋勝之助の博愛社創設に向けて協力した人物である。その後、岡山孤児院合併以来、石井の下で働くことになり、後年は按手札を受け、組合教会の牧師となった。『博愛雜誌』に於ける彼の論文については、前掲拙稿を参照されたい。
- (8) 石井が機関誌刊行のキーパーソンとして挙げ、実際発刊された後も編集人となる渡辺栄太郎は一八六七年五月五日（旧暦）、石井と同郷の馬場原で生まれており、石井とは二歳違いである。石井と同様に岡山において金森通倫から洗礼を受ける。同志社に学び、一九〇一年卒業、帰郷したあと高鍋教会で尽力し、その後岡山孤児院の職員となる。その後サンフランシスコにわたり、孤児院出身者の渡米事業に貢献する。一九〇七年に帰国し、足利教会、柏崎講義所、一九一三年からは宮崎教会牧師となり、後半生はキリスト教伝道に尽瘁することになる（『信仰三十年基督者列伝』警醒社、一九二二）。
- (9) 石井十次資料館所蔵史料。ちなみにこの史料は『石井十次日誌明治二九年』の巻頭に「岡山孤児院新報認可書」として掲載されている。また石井の七月二三日の日誌には「岡山孤児院新報発行届すめり」とある。
- (10) 例えば石井の日誌、一八九六年八月三〇日の段には「いまや斧を樹の根に置かると云ふ語を題とし孤児院新報三号社説に草す」とあるように、実際刊行された号にも無署名で掲載されているがこれは石井の論文と判断していくことが出来る。
- (11) 『明治四〇年度の報告』には「孤児院新報（毎月一回、一万八千部を印刷す、六頁乃至十六頁）」と記されている（『石井十次日誌明治四十年』）。また英文新報のことも他の日誌にあるが、これについてはまだ確かめていない。
- (12) 救世軍機関紙『ときのごゑ』は一九〇三年頃には一万千五百部くらいであり、家庭学校機関誌『人道』は全号（一九〇五―一九三二年）をとおして、二千から三千部くらいである。また先の『博愛雜誌』はせいぜい二〇〇から三〇〇程度の発行部

- 数である。
- (13) この論文からは日露戦争への取り組みと共に、石井の皇室や天皇観について窺えるのであるが、第九三号（一九〇四年七月二〇日）の「岡山孤児院に対する恩賜」といった論文にもそれが言及されている。この課題については田中真人「石井十次の皇室観・国家観」同志社大学人文科学研究所、室田・田中真人編『石井十次の研究』（同朋舎、一九九九）所収を参照されたい。
- (14) 第九五号（一九〇四年九月一五日）掲載の「軍人幼児教育」という記事には「本会は出征軍人の幼児にして保育者なきもの、保育方を引受けんがため左記育児院等と特約を結び本会の費用を以て保育方を委託すること、せり故に保育希望の方は本会又は左記育児院の中へ御照会相成べく候尤も幼児に関する市町村役場の戸籍証明書は必ず添付を要す」とし濃尾育児院（岐阜）と汎愛扶植会（大阪）と東京孤児院と共にこうした会を立ち上げている。岡山孤児院と日露戦争とかかわりの一端をしることが出来る。
- (15) 「不足期につきて天下の同情に訴ふ」（第二二二号）の論文には、東北凶作の犠牲となった孤貧児の救済につき、夢の中でイエスキリストが石井の枕元に大きな籠を背負つて現れた有名なエピソードについて論じている。その中で石井は「此の孤児院初めから汝が背負ふて居るのではない。これは今汝の見た通り私（キリスト）が背負ふて居るのである。また汝はモー此の上狭くて孤児院には児供を入るゝことは出来ぬと思ふて居るけれども今お前の見た通り入るればいくらでも入るではないか、お前は決して心配せずになゝ有り丈の力を出して籠の底に手をかけて手伝さへすればそれでよいのだ、と私に黙示をもて教訓を垂れ給ふたのであると思ふてその時から二十年來の重荷を全く主キリストに託ね奉りて心の底から安心いたしました」云々とある。
- (16) 例えば第六六号（一九〇二年四月一〇日）には「在米国牧野虎次君より左の書簡と共に金式弗送金せらる」としニューヨークヘラルド紙に牧野が岡山孤児院に関する記事を投函し、全文とはいかないが掲載されたこと、そしてその読者から二ドルの寄付があったことを報じている。この新聞のタイトルは「THE CHRISTIAN HERALD」で、タイトルの下には「AN ILLUSTRATED FAMILY MAGAZINE」と記されている。一九〇二年一月一五日発行の号に JAPANS GREATEST ORPHAN-AGE というタイトルで一面トップとさらに本文に写真付きで紹介されている。この記事の末尾は、「誰か東洋の父なし子の鳴き声を聞いてくれる人はいいますか」というように異国の人々に哀願する文章となっている。
- (17) 例えば菊池義昭『岡山孤児院新報』に見る「岡山孤児院十二則」の形成過程』『東北社会福祉史研究』二十四号所収（二〇〇六）ら一連の岡山孤児院史に関するもので、この雑誌が中心に利用されている。

(18) 「岡山孤児院同窓会規約」の三条「目的」には「一岡山孤児院と本会員との関係を親密にし岡山孤児院の発達を謀ること一 会員相互の厚誼の親密及知識の交換を謀ること一岡山孤児院理事並に評議員の選挙孤児院組織の変更其他重要な事件に關し 本会より建議し又諮問を受くる時之が意見を發表すること」とあり、また六条の「年会」には毎年四月二〇日の創立記念日に年会を岡山にて開催されることが規約されている。

(19) 例えば第五九号（一九〇一年九月一〇日）に掲載の群馬県前橋で開催された音楽幻灯会の報告をみておくことにしよう。  
岡山孤児院基本金募集慈善音楽幻灯会趣旨書

岡山孤児院は去る明治廿年四月現院長石井十次氏の創立する所にして爾來星霜を閲すること十五ヶ年天下無告の孤児を收容すること五百九十一名内既に同院の教科を卒へ進んで中等の学を修むる者四十名、社会に出て各種の業務に就けるもの二百有余あり而して目下教養の孤児は二百六十名にして、毎月の費額凡そ金壹千貳百元を要し、其他塾舎の修理、学校の設備等投資の急を告ぐる者少なからず、幸に各地賛助員の定時義捐する所と、有志者の随時寄付する所の金品と、院内実業部の収入と相待て、其経費の大半を支ふと雖も、尚常、窮乏を免れずと云ふ今弥院長石井氏は孤児を以て組織せる音楽隊を率ひ來りて当地に投じ幻灯隊によりて同院の履歴及び実況を示し普く博愛義侠なる各位の同情を仰がんとす依て茲に同志相謀り発企者となり同院をして益々財政上の基礎を強固ならしめ後顧の憂なく孤児教育の好果を収めしめんがため基本金募集の目的を以て慈善会を開き其所得を挙げて之を寄贈し永く院児をして仁慈なる各位の温情に浴せしめんと欲す希くは一夕の清閑を割きて其訴ふる所を聴き以て同朋相憐れむの至情を垂れ玉はんことを

ちなみにこの発起者には上毛孤児院関係者の金子尚雄、宮内文作をはじめ、堀貞一やキリスト者、上毛新聞社等があがっている。こうした各地で行われた会の趣意書は沢山掲載されている。

(20) 財政収入を安定させるためには、賛助員制度が大きな役割を果たしていくことになるが、第四五号付録の「明治三十三年六月調岡山孤児院地方委員姓名録」といったものは、日本各地での拠点、その責任者が列挙されている。例えば東京なら飯田良作、原胤昭、田川大吉郎、小崎弘道が愛媛県今治なら蜂谷徳三郎、露無文治、矢野元吉、青野兵太郎が就いている具合である。また第五三号には三好退蔵ら五人の署名の下に「貴族院議院間における賛助員運動」という記事が掲載されている。

(21) 例えば「一色哲」メディアとしての音楽伝道隊「同志社大学人文科学研究所、室田・田中真人編『石井十次の研究』（同朋舎、一九九九）所収は各地において実施された音楽幻灯会の様子を、地域の新聞等を駆使して、その会の実体につき論究したものである。

(22) まずハワイの一例を挙げておこう。ハワイホノルルで刊行されている日本語新聞「やまと新聞」第四六一号（一九九九）

月七日)においては「岡山孤児院と其目的及幻灯会」といった論文が掲載されているし、「広告」欄に九月八日午後八時、日本人芝居小屋旭座において岡山孤児院の幻灯会が模様される事が報じられている。そして同紙第四六五号(一八九九年九月一六日)には寄付者名と寄付金額が詳細に掲載されている。東アジアに関しては安藤邦昭「石井十次と朝鮮半島」岡山孤児院音楽幻灯(活動写真)隊の軌跡を中心に、「人文論叢」第二六号(蔚山大学校人文科学研究所、二〇〇七)といった研究がある。また同氏の「石井十次と朝鮮半島」報道された岡山孤児院を巡って(第3回石井十次研究会報告資料)は、現地新聞を利用した研究である。

※この論文は『密教文化』第一七八号(一九九二年三月)に掲載された「石井十次と『岡山孤児院新報』を大幅に加筆訂正したものである。史料の閲覧に際しては、石井記念友愛社の児島草次郎氏に大変御世話になった。なおTHE CHRISTIAN HERALD紙の記事については関西学院大学人間福祉学部准教授陳礼美氏の協力を得た。記して感謝したい。